

(1) 実施機関名：

京都大学防災研究所

(2) 研究課題（または観測項目）名：

地震発生頻度のリアルタイム予測

(3) 最も関連の深い建議の項目：

1. 地震・火山現象予測のための観測研究の推進

(2) 地震・火山現象に関する予測システムの構築

(2-1) 地震発生予測システム

ウ. 地震活動評価に基づく地震発生予測

(4) その他関連する建議の項目：

1. 地震・火山現象予測のための観測研究の推進

(3) 地震・火山現象に関するデータベースの構築

ア. 地震・火山現象の基礎データベース

(5) 本課題の 5 か年の到達目標：

本課題では主として次に挙げるモデルを検証する。

- ・グーテンベルグ・リヒター則
- ・ETAS (Epidemic-type Aftershock Sequence, Ogata, 1988)
- ・現在の微小地震との関係
- ・過去の大地震の位置との関係
- ・活断層との関係

これらのモデルを用い、ある特定の地域の特定の期間に対する地震活動の事前予測を行う。第一段階として、日本の内陸と海域をいくつかの大きな地域に分割し、1 年から 5 年の期間の予測を行なう。

最初の 4 つのモデルは時間依存であり、1 日ないしはそれより短時間に更新されるリアルタイムな情報更新システムに適応できる。例えば、米国カリフォルニア州では、グーテンベルグ・リヒター則に基づき 1 日間の地震発生を予測するシステムが運用されている (<http://pasadena.wr.usgs.gov/step/>)。この他、ひずみレートや歴史地震、活断層の情報をを用いた静的なモデルの検証結果を利用し、その手法を改善する方法を検討する。

地震活動を正確に特徴付けるため、考慮しなければならないいくつかの課題がある。例えば、小イベントについての空間的な検出可能範囲の整合性、長期間にわたる最小イベントの整合性、深さの決定精度、海域での震源決定精度、検出能力の整合性である。これらの要素を地震データ（気象庁一元化カタログ）で検証する。

この課題の重要な部分は、実際の地震データを用いた定量的な事前予測の検証である。我々は、すべての結果を再現し点検できるように、用いたアルゴリズムを明確に記述する。現在のデータを用いて継続的にモデルを改良する予定であるが、これらのモデルを統一的に評価できることを保証する。また、事前予測の結果と過去のデータによる後予測の結果とをはっきりと区別する。改良したモデルに対応する物理モデルを逆問題的に推定し、地震発生のメカニズムに帰着させる。

(6) 本課題の5か年計画の概要：

平成21年度は、特にグーテンベルグ・リヒター則および ETAS を用いて、日本の内陸と海域をいくつかの大きな地域に分割し、1年から5年の期間の地震活動の事前予測を行なう。地震活動の記録を整理し、検証・開発すべきモデルを特定する。特にグーテンベルグ・リヒター則及び ETAS を用いて、1年から5年の期間の地震活動の事前予測を行う。複合的なモデルを理解する手助けになるよう、視覚に訴える情報表示システムを構築する。

平成22～25年度は、時間依存のモデルのリアルタイム応用手法を開発し、地震活動の事前予測の検証をする。同時にモデルの改良を進め、改良モデルに基づき地震発生メカニズムを推定し、発生予測モデルに物理的意味を与える。すべての記録が全国規模であり、その膨大な情報量をモデルの中で取り扱うために、大型計算機を利用する。

(7) 平成24年度成果の概要：

我々は現在、前震の発生に基づいた地震の発生確率をリアルタイムで計算している。日本の過去の地震カタログを調べたところ、ある地震（前震）がより大きな地震を伴う確率は5%程度である。そこで、現在の地震の発生状況をリアルタイムで入力し、より大きな地震が発生する確率を Gutenberg-Richter 則に基づいて計算している。日本周辺の領域について、このような確率を自動的に計算し、その結果を表示するウェブサイトを設置している。

図1は2012年11月19日の根室沖の地震(Mw5.2)の1時間前の地震発生確率の分布を示す。これらの地震は、地震発生確率が高いと計算されていた地域（黄色）で発生している。これらの地域はそれぞれの本震の発生前から地震が発生していたからである。

地震活動の統計的予測結果を検証する手法についての研究を行い、予測の正確性を評価する新しい手法を提案した。このパラメータは、地震が発生し地域や発生しなかった地域を含むすべての地域を考慮することができるため、より良い統合的な指標となっている。

(8) 平成24年度の成果に関連の深いもので、平成24年度に公表された主な成果物（論文・報告書等）：

Smyth, C., M. Yamada, J. Mori, 2012, Earthquake forecast enrichment scores, Research in Geophysics, doi: 10.408/rg2012.e2.

(9) 平成25年度実施計画の概要：

我々は、前震モデルを更に発展させ、評価を行う。また、背景となる地震の確率モデル（MARFS）の改良も行う。確率を更に適切に計算するために、前震と本震のマグニチュードの分布について調べる。さらに、1時間ごとのリアルタイム地震発生確率を改良する。そのためにクラスタリング手法を活用する。

(10) 実施機関の参加者氏名または部署等名：

James Mori, 大見士朗, 加納靖之（京都大学防災研究所）

他機関との共同研究の有無：有

宮澤理稔（東京大学地震研究所）

(11) 公開時にホームページに掲載する問い合わせ先

部署等名：京都大学防災研究所地震予知研究センター

電話：0774-38-4205

e-mail：mori@eqh.dpri.kyoto-u.ac.jp

URL：http://www.eqh.dpri.kyoto-u.ac.jp/ mori/

(12) この研究課題（または観測項目）の連絡担当者

氏名：JamesMori

所属：京都大学防災研究所 地震防災研究部門

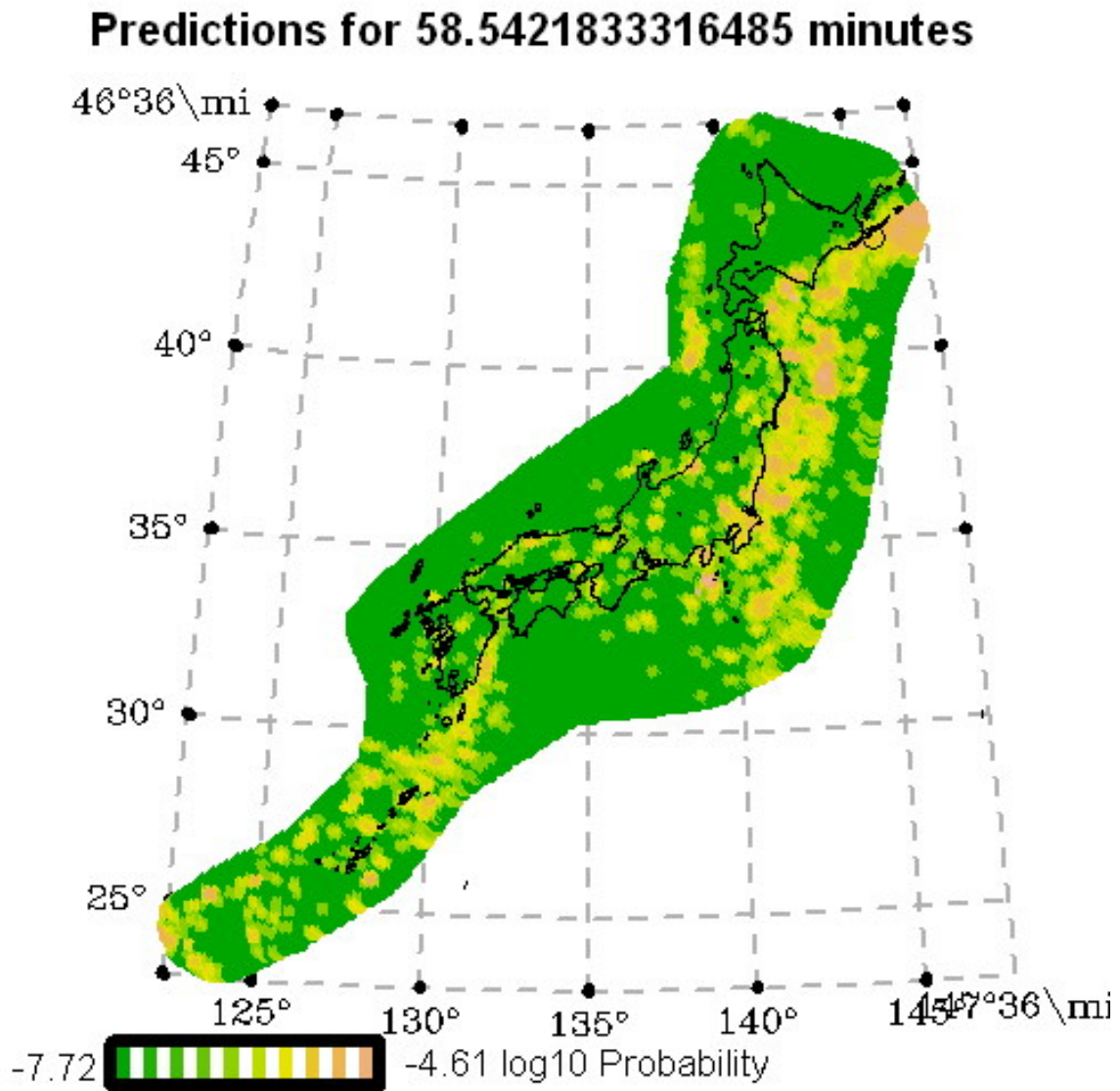


図 1

2012 年 11 月 19 日の三陸沖の地震（Mw5.2）の 1 時間前の地震発生確率の分布。黒丸が地震の震央を示す。